

二〇二〇年度 将来展望講座（第二〇回）

「塾高での学び―社会での仕事」

未来からの留学生に贈る

これまでの優等生　これから
の優等生

～平凡な塾高生のための
逆転術～

作家／キャリア教育研究家

福山 敦士氏

慶應義塾高等学校 将来展望講座

「塾高での学び―社会での仕事」

開講の趣旨

「学問の目的は、知識、教養の範囲を広げ、物事の道理をつかみ、人としての役割を知ることにある」
『学問のすすめ』第二編」と福澤先生は教えられました。

慶應義塾高等学校に学ぶ生徒は、高校を卒業すると入学試験を受けることなく、そのまま大学に進学することが許されます。進学の際には各学部の内容、大学生活の意味について、数多くの情報が提供されますが、残念ながら、それらが生徒自身の将来を考える素材に十分至らないのが現状です。生徒の多くは、自身の人間としての成長についてあまり考えることなく、漠然と就職に有利な学部選択に終始します。学校での生活が、実際に社会のなかでどのような意味を持つのか、社会で活躍されている方から、生きたことをいただき、生徒たちにインパクトを与えることがぜひ必要と考えます。

このような視点から、生徒たちと同じ環境で学んだ経験のある卒業生を通して、実体験を踏まえたお話を聞く機会を設定する考えに至りました。塾高ではこうした試みを含め慶應義塾の目指す教育①【**社会の先導者の育成**】②【**総合的な人間教育**】の達成のために、今後とも最大限の努力をしてゆく所存であります。

福山 敦士（ふくやま あつし）

作家／キャリア教育研究家

一九八九年一月一八日生まれ

（三二歳）

略歴

二〇〇七年

慶應義塾高等学校卒業（第58期）

在学中、四五年ぶりに春の選抜甲子園へ出場
ベスト8へ進出

二〇一一年

慶應義塾大学環境情報学部卒業

二〇一一年

株式会社サイバーエージェント入社

社内新人賞受賞

二〇一四年

グループ会社（株式会社シロク）取締役就任

二〇一六年

独立し、株式会社レーザービームを創業

二〇一八年

株式会社ショーケース執行役員就任

二〇一九年

取締役就任

二〇二〇年

ギグセールズ株式会社取締役就任

現在、作家、キャリア教育研究家、経営者等多方面で活躍中



はじめに

司会（生徒）

皆さん、こんにちは。第十回将来展望講座の司会進行を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。思えば、こうして生徒がホールに集まるのも久しぶりのことだと思っています。年末となりましたけれども、ようやく今年最初の講演会がこれから開かれます。

今回ご登壇いただきますのは、経営者、キャリア教育研究家、そして作家としても多方面でご活躍されている福山敦士さんです。福山さんは塾高第五十八期の先輩であり、大学は環境情報学部で学ばれていらっしやいました。

卒業後は新卒でサイバーエージェント社に入社され、二十代のうちにグループ会社での取締役就任、独立しての起業、さらには三度の事業売却、いわゆるM&Aをご経験されており、いわば「若手経営者のカリスマ」とも呼ぶべき経歴をお持ちです。一方、作家としてもキャリア関連の書籍を多数出版されており、累計発行部数は十万部を超えていらっしやいます。

そんな福山さんに、今日は「未来からの留学生に

贈る これまでの優等生 これからの優等生―平凡な塾高生のための逆転術―」と題して講演をしていただきます。最後には質疑応答の時間を設けておりますので、ぜひ質問を考えながら、お話を聞いてみてはいかがでしょうか。

はじめに、古田校長より開会の言葉を頂戴したいと思います。

古田（校長）

皆さん、こんにちは。この将来展望講座は、社会の第一線で活躍している先輩方の話を通じて、皆さんが自分の将来について考えるための材料やヒントを得てもらうためのもの、文字通り、皆さんが将来を展望するための講座です。

講師としてお招きをした福山敦士さんは、多方面で活躍をされている、非常にお忙しい方です。時間を割いて来てくださった福山さんに心より感謝を申し上げます。また、この講座を主催してくださっている同窓会の皆さまにも心より御礼申し上げます。

慶應義塾の一貫教育の中にいる皆さんは、大学受験等にとらわれることなく、自由に自分の将来を思い描くことができます。これからの時間、皆さんにはぜひ福山さんの話に全力で向き合ってほしい、そしてそこから将来を考えるための材料やヒントを

しっかりとつかみ取ってほしいと思います。きちん
とした態度でこの講演会に臨むことが福山さんに対
する最大の感謝の気持ちを表すことにもなると思
いますので、皆さん、積極的に講演に参加してくだ
さい。

それでは、早速ご登壇をいただこうと思います。
福山さん、よろしくお願いいたします。



「未来からの留学生」とは？

福山 こんにちは。お忙しいところ、お集まりいただきましてありがとうございます。ただいまご紹介にあずかりました、福山敦士と申します。会社の経営や作家、はたまた学校の先生などさまざまな分野で活動させていただいていますが、そのすべては「学問をつくる」という目標に紐付いています。この目標がどこで見つかったか、なぜその目標にしたかという話は後ほどします。

事前に約二百五十個の質問をいただきまして、「将来何をやっていいかわからない」「得意なことが分からない」「未来が不安だ」などの意見がありました。全部は答えられないかもしれませんが、前半は僕の自己紹介を交えたキャリアの話を、後半は皆さんへメッセージという形で、分けてお話ししたいと思います。でも、全部答えたいなと思いましたので、後日YouTubeで「百の質問」と題して配信させていただきます。重複しているものもありますので、ぜひご覧ください。

まず、「未来からの留学生」とは何か。これは皆さんのことです。この言葉は僕がSFCに進学した

時に学部長の富田勝先生からいただいた言葉です。

君たちは未来からの留学生だ。大学を出て会社に就職する人もいるし、大学院に進む人もいる。いろいろな道に進むけれど、皆さんは社会で活躍するために今、学校に留学しに来ている。そういう気持ちでもって学んでほしい。

これは塾高生に一番当てはまる言葉ではないかと思っています。「学部の選び方が分かりません」という質問もいただきました。ただ、教員の方に反発されるかもしれませんが、慶應義塾大学に進むことさえも疑っているのではないかと思います。僕のクラスでは、法科大学院に進みたいということで、別の大学に行った友人もいます。一年生の時の同級生も音大へ進んで、そのままピアニストになりました。そのくらい、さまざまな選択肢があります。

もちろん慶應義塾大学という環境に進むこともできますが、そこから疑って、なぜ大学に行くのか、なぜ学部に進学するのか、なぜ社会に出るのか。ここに問いを持っていただきたい。そこには必ず目的があるはずです。そこは未来で活躍するために留学に来ているという認識を持っていただけますと幸い

です。

「これからの優等生」という話ですが、この話をメインのテーマにしたいと思います。僕の答えも出しますが、皆さんも自分の中に問いを持って、自分なりの答えを持つていただくことを望んでおります。最後は「平凡な塾高生」。これは皆さんのことを言っているわけではなくて、平凡な塾高生だった僕が伝えたい話ということで聞いてください。皆さんも秀でている部分はあると思いますが、平凡な部分もある。隣の仲間と比べて自分が突き抜けていないとか、コンプレックスがあるかもしれません。自分の中の内なる反骨心と向き合って、そこからどう突き抜けていくかを一緒に考えていければと思います。

ちなみに、今日の僕の中でのゴールは皆さんに「問いをつくる」ということです。今日お話ししたことを全部記憶するのは難しいので、自分だったらどうするか自問自答する、良質な問いをつくるということを目指したいと思います。一〇〇パーセント理解していただく必要はありません。「福山、こう言っているけど、どうなの？」と斜め上の目線からグイグイ突き刺していただきたいと思います。



志と目標の高さでは負けない

それでは、次の数字から見ていきましょう。

6.1
5.8
6.8

上から順に高校一年生、二年生、三年生の時の僕の成績です。二年生が一番危なかったです。化学で二点を取ったりして、平凡どころではありませんでした。いろいろな先生にサポートしていただいて、何とか三年で卒業できましたが、成績は中の下ぐらいでした。だから、もしかしたら学業は得意ではなかったのかもしれませんが。

僕は二〇〇四年に推薦入試で入りました。塾高で推薦入試制度が始まって、二期生です。慶應義塾高等学校の一般入試対策もしつつ、たまたま推薦で入りました。世間からは基本的に野球推薦と見られていました。そこは堂々と受け止めつつ、でも野球だけではなく、社会に出てからも活躍して、今後推薦入試で入学される方が胸を張って生きていけるような存在になればと思っています。

そんな平凡な福山がなぜここに呼ばれたのか。歴

代の先輩方のポスターを見ると、平成元年生まれの三十一歳、おそらく最年少です。先輩方は四十歳以上、日系大手や世界をまたにかける先輩方が多い中でなぜ私が呼ばれたのか。並べて見ると、圧倒的に僕は劣ります。そう思っています。ただ、負けていないと思う部分も実はあるんですね。皆さんもこれは真似できるかもしれません。

「学問をつくる」という目標を持っています。志でもあります。過去の実績、やってきたこと、動かしてきたお金の大きさでは負けますが、唯一負けていないと思うのは志の高さ、未来に対する目標、ウィルの部分。これは負けていないどころか勝っているんじゃないかと思うぐらいの目標を立てて、日々活動しております。

十代、あるいは二十代の方もいるかもしれませんが、現時点での実力ではなく、未来に対するウィルで勝つことは十分できます。未来に対して堂々と嘘をつく、ハッターをかます、それを現実に変えていくことができるというのではないかと思います。

過去の経歴で嘘をつくことは駄目ですけど、未来に対してハッターをかますことはオーケーです。ハッターの規模以上の結果は訪れません。起業家で成功する人はだいたいそうですね。「こういう未来

をつくるんだ」と言って、現実に合わせていくことの連続ですので、志や目標の高さでは今からでも大人に負けてほしくないと思います。



「日本一」を掲げてつかんだ

甲子園出場

これを学んだきつかけは野球部時代にあります。野球部のグラウンドは日吉台球場といって、理工学部りこうがくの近くにあります。そこでは「KEIO 日本一」と掲げていました。今は塾高出身のプロ野球選手が何人か出ていて、今年もドラフトにかかりました。この十年で見ると、野球強豪校並みにプロ野球選手が出ていますけれども、僕らの代は四十五年ぶりに選抜甲子園に出ました。

でも、甲子園に出たから、取って付けたように「日本一」と言ったわけではなく、出る前から「日本一になるんだ」と掲げてやっていました。その夢が少し近づいて、半世紀ぶりに甲子園出場となりました。

この時、僕は学びました。「あ、日本一と言っているんだな」と。今も強いですが、横浜高校、東海大相模や桐蔭学園、桐光学園という、文字通り野球推薦があるような学校と、推薦が始まったばかりの慶應義塾。並べると、「日本一」なんて口が裂けても言えない気がしていたのですが、上田誠監督をは

じめ、七条義夫先生しちじょうよしお、赤松衡樹先生あかまつひろきたちが「日本一」と掲げて張り出したら、急に甲子園が近づいたという原体験があります。

皆さんも「官僚になる」とか「総理大臣になる」とか、こんな目標を言ったら恥ずかしいかなと思っ
ていても、言った方が近づきます。そして、言ったからといって、「おまえ、できてないじゃん」と言
われることはありません。高校卒業後の人生の方が
長いため、目標と期日を定めたら、必ず叶います。

夢を目標にして、期日を切って逆算すると、だいたい叶います。受験勉強で塾高に入られた方はそれ
をやってきたはずです。だから目標を掲げて、要素
分解して、一個ずつクリアしていけばいいのでは
ないか。プラス、大きい志。人によつては、日本で
はなく世界一を掲げる人もいますが、それ
でも構いません。

作家として「学問をつくる」

私はいろいろな仕事をしていて、肩書きが複数あり、一言で説明しづらい存在なのですが、一応作家と名乗っています。何をつくっているかというところ、本や会社、事業をつくって、それを売っています。そのすべては「学問をつくる」という目標の下、逆算した結果、必要だと思っているのでやっています。本は未来の教科書になるべきコンテンツをつくるために書いています。半分自分のために書いています。もちろん出版社からオファーされて書くのですが、基本的には自分が書きたいから書いています。出版活動における目標は百万部売ることです。一冊一万部という戦法で、百冊書けば百万部売れるなど。そういう積み重ねをゴリゴリやっています。

これは口で言うのは簡単ですけど、ほとんどの人はやりません。一発当たればいいなと一回出して止める方が多い中、僕は一冊一万部。ベストセラーでもなく、「そこそこ売れたね」を百回繰り返し返してベストセラーを狙おうと思っています。同時に、教科書をつくることによって、生まれてくる百万人の子供たちに教科書を配布する。そうすると、一年間

で一気に百万部が売れるだろうという戦略です。

質問の中に「高校時代に彼女はいましたか」とありましたが、塾高二年生の時に初めて彼女ができました。県内私立の女子校の子で、かわいいセーラー服を着ていました。奇しくも甲子園に出た時に、雑誌を読んで連絡をくれたという、野球部としては大サクセスストーリーで彼女ができたという背景があります。

でも、付き合って三カ月後に別れました。なぜ別れたのか。いまだに解明できていません。別れて半年後、塾高三年のテニス部の先輩と付き合うという屈辱も味わいました。何とも反応し難い話ですね。皆さんは、そういうことはしないようにお願いします。もし現在、塾高生を彼氏に持つ女性から言い寄られても、「一度考え直すように」と優しく諭してください（笑）。

塾高へ進学したのは

SFCに行きたかったから

僕も塾高生の時やSFCの時に諸先輩方の話を聞きました。時代の先端を走る起業家の先輩方がやって来て、いろいろな講演を聞いていました。正直、話している内容はあまり覚えていませんが、そのパッションや気合い、根性、話している風景は覚えていて、いつか僕もそうなりたいなと感じたので、今日は自分が塾高生だったら聞きたいと思う話をしたいと思います。

幼少期を振り返ると、三人兄弟の三番目で、横浜市生まれの横浜育ち。港南区で生まれて中区で育ち、青葉区でほとんどを過ごしました。幼稚園の頃の将来の夢は「サラリーマン」。ませた子供ですね（笑）。当時、父親が独立して大失敗したので、家族から「敦士君はサラリーマンになってね」と言われていました。寝ている間はずっと言われていたんじゃないかというくらい、すり込まれていましたね。

それは二十二歳ですぐに達成しました。ただ、サラリーマンでい続けてほしいという両親のメッセージをすぐに裏切って、二十七歳で独立し、身一つで

生きていく道を選択しました。親や祖父母の本当のメッセージは「力強く生きてほしい」「独立自尊の気持ちを持って生きてほしい」ということだったと解釈しています。これからの世の中はサラリーマンも安定ではないですからね。

小学校時代は一年生から野球をしていました。その時の将来の夢は「分らない。たぶん成人」。「二十歳になった僕」という質問にひどい回答をしています。本当はプロ野球選手になりたかったはずなのですが、当時の僕はその目標を堂々と言えない弱さがありました。

小学六年生の頃、「総合的な学習の時間」が始まって、僕の代ではその第一期生だったのですが、環境保護大作戦なるものを発起しました。この時、僕には、公園に落ちているごみを誰も拾わない現状をどうにかしたいという強い正義感があった。それを先生に提案したら、「いいね。じゃあ環境保護をテーマにしましょう」となって、公園にゴミ箱を設置するプロジェクトをやることになりました。

いざ始めてみると、これは結構難易度が高い話で、単純にゴミ箱をダンボールでつくって置くのでは駄目です。まず緑地事務所に電話して、実物を見せなければいけない。置いたら定期的に点検しに行っ

て、チェックシートを付ける。やりたいと思ったことをすぐ行動に移し、現実を変えようとする思考は、「総合的な学習の時間」で学んだという自負があります。

それから当時、環境問題というキーワードが僕の中ですごくホットでした。時代的にもリデュース・リユース・リサイクルの3Rと言われていました。これからの時代は環境保護だと思って、大学受験案内を読んでいたら、慶應義塾大学に環境情報学部があるということに気づいた。

小学校の同じクラスの半数が中学受験をする中で、僕は公立に進学しました。進学を考えて、「高校、大学とどうやって進んでいくのだろう」という問いがあった時に、環境問題をやりたいなと。これができる学部がないかなという課題感の中で見つけたのがSFCです。だから、塾高を選んだ理由は環境問題をやりたかったから。そして、そのためにSFCに進みたいから。その最短ルートは塾高ではないかというのが当時の僕の淡い思いでした。

しかし、結果的に環境問題はやりませんでした。塾高生活三年間の中で、興味の先が変わったからです。認知科学、人工知能の分野に興味がいき、今もフィールドを変えて社会実装をするべく、その研究

を続けているつもりです。要は、最初のきっかけは何でもいいし、目標が後から変わっても問題ないということです。当初の思いに引きずられすぎるのはナンセンスです。自分の考えと同じように、時代も変化しているので。



エロメガネ事件、

野球と勉強に打ち込む日々

中学校時代の話です。横浜といっても、すぐく田舎の方です。皆さんが想像する横浜はみなとみらいあたりだと思いますが、僕が住んでいた青葉区は、こどもの国や桐蔭学園、日体大が近くにあり、自然豊かな田んぼに囲まれた町です。非常にヤンキーが多いところで、からまれてお金を取られることもありました。小学校、中学校と受験する人以外は、ほぼエスカレーター式で入る中学校です。

そこでエロメガネ事件というのが起きて、これが塾高に進む一つのきっかけとなりました。ある日、自宅でエロ本らしきものを見つけてしまいました。それが父親のものなのか、兄のものなのか、友人のものなのか、いまだに不明ですが、当時中学一年生の僕はめちゃくちゃ興奮して、これはすごいと。舞い上がって仲間に「ちょっとうちに来い。俺んちに来れば、いいのがあるぞ」と言った。「あっちゃん（当時のあだ名）ちに行けば、新しい世界がある」と男子の間で評判になりました。

一方、その噂が女子にも広まってしまい、「どう

やら福山君はエロらしい」と言われるようになった。今考えれば、エロいことは全然悪いことではないけれど、当時は思春期で、女子の目も意識するタイミングだった。かつ、僕はメガネをかけていたので、「エロメガネ」と言われました。それがめちゃくちゃショックで、うつまではないかないけれど、学校に行くのが少し怖くなってしまいました。女子の目がすごく気になる。みんなが僕のことを変態だと思っているんじゃないかと怖くなった。

そこで、「彼女をつくるという道を一回ここは諦めよう。野球と勉強に集中する。選択と集中だ」と決めた。あらゆる誘惑を断ち切り、野球に没頭して、とにかく勉強しまくった。その結果、中学校の野球では全国大会春夏連覇という、素晴らしい結果を残すことができた。補足すると、僕の実績というより、同じチームに今プロ野球選手として活躍しているメンバーが二人もいて、彼らが打ちまくって勝ったというのが実際のところでした。

受験勉強もしていたので、推薦ではありませんが、塾高に入ることができました。男子しかない環境と聞いてすごくホッとした記憶があります。幸い、二年の春に選抜甲子園に出ることができました。

今もそうかもしれませんが、当時はすごい同級生

がたくさんいました。大企業の社長の息子とか、某巨人軍の監督の息子とか、いろいろな友達がいた。野球は少し自信があつたのですが、すごい人に囲まれてしまい、ずっと劣等感があり続け、どこで突き抜けようかと日々考えていました。少なくとも勉強では勝てないと思ったので、どこで勝てるのかと自問自答する日々でした。

野球部ではピッチャーとして活躍するかたわら、野球部漫才をしていました。後夜祭に芸能人の方とかが来るのですが、そのあとに「野球部漫才、どうぞ」「はい、ど〜も」とやって、笑いを取るみたいな。当時は漫才ブームもあって、一瞬だけ漫才師になろうかなという気持ちも芽生えましたが、お気づきのとおり、滑舌がめっちゃ悪いので、自分の動画を初めて見たとき、自分でも何を言っているのか聞きとれず、すぐに諦めました。



「ウサギとカメ」のウサギだった

野球部時代

塾高生活の背景には両親の離婚がありました。それほど珍しいことではないと思いますが、これも僕の人生をつくる上で大事な出来事でした。

父親が起業したけれど、うまくいかなかった。バブル絶頂期に独立して、不動産で大損して、連帯保証人をかぶって借金だらけになってしまいました。そこで、それほど仲は悪くないのに戦略的に離婚してもらって、母子家庭としていろいろな補助を受けることを選択しました。そんなこともあって、なかなか心が落ち着かず、集中できない野球部時代でもありました。

なぜその話をしたかという、甲子園に出た二年生の春以降、僕は夏からベンチを外れているのです。甲子園に出たことは今でこそ誇れますが、脚光を浴びたその次のシーズンからベンチを外れて、スタンドで応援していた。そういう浮き沈みを体験した時期と両親の離婚が重なっていて、正直メンタルがボロボロでした。そんな時に野球部の監督やコーチに相談して、救われた部分もあります。けれど、同学

年の野球部の仲間や塾高の友達には打ち明けることができず、苦しんだ時期がありました。

皆さんもおおよそ恵まれた家庭の方が多いと思いますが、よく聞くと、親の仲が悪いとか、離婚しているとか、家庭の事情が複雑な方が結構います。それはぜひ糧として、どうパワーに変えていくかと考えていくと思います。

当時、一番を付けていた田代啓明君は中学校では同じチームで、僕がエース、彼が三番手のピッチャーでした。塾高野球部に一緒に入って、二年生までは僕が一步リードしていたのですが、選抜に出て、僕がベンチを外れたあと、代わりに彼が入ってエースになった。雑誌に載るほどの、プロ野球注目の選手になりました。

その原体験が今の僕をつくっていると思います。めちゃくちゃ悔しい経験をして、かつ追い抜かれた。「ウサギとカメ」のウサギでした。最初はちやほやされて、ちょっと天狗になった時期がありました。だから、野球部の全体練習が終わったあと、当時は怪我をしていたこともあって、残って練習をしなかった。一方、彼は全体練習が終わったあとめちゃんと走り込みをして、ウエートトレーニング場で体を鍛え、翌日に大事な試合を控えていたにもかかわ

らず、練習を止めなかった。調整ではなく挑戦、成長を続けたのが彼のスタイルでした。

僕はそれを見て、「いや、俺は怪我してるから」「明日、試合があるから」と自分に言い訳をしながら楽をしていた。その結果、ベンチから外れました。三年の夏はぎりぎりベンチに入れましたが、めちゃくちゃに打たれて負けるといふ形で高校野球人生は終わりました。

甲子園に出たあと、もつと言うと、出る前から僕は力を抜いていた。自分はウサギだったと痛感したので、次のタイミングで人生をやり直そうと思った。一時は改名しようかとも考えたくらいです。そんな自分の人格を一気に変えるタイミングとして、SF C進学時、キャラ変をしました。



苦しい学生時代

準硬式野球部は二十年以上、優勝から遠ざかっていたのですが、僕が創部初の学生コーチ（監督的役割）としてチームを率いてリーグ優勝・全日本大会出場へ導きました。

同時にこの頃、母親が倒れました。市営地下鉄のセンター北駅で突然倒れて運ばれた。僕が中学の時から父親の代わりに母親が朝昼晩と働いてくれていたのですが、兄貴も大学を辞めて僕の学費を払ってくれていたのですが、塾高三年の後期の学費は兄貴が払ってくれました。そういう形でやってきたので、母親がついに力尽きて倒れてしまった。

兄貴は大学を辞めているので、僕も大学を辞めて働くこうと思った時期があったのですが、「さすがに敦士は辞めてほしくない」と母親に説得されました。大学に行かせてもらえるのだったら、野球でも結果を出したいし、学業でも結果を出したいと思いました。

塾高時代は中の下、下の下くらいの成績でしたけれど、大学では人格を変えて、教授に食らいつき、学会発表をさせてもらいました。認知科学学会と人

工知能学会。当時のゼミでは学部生としては初めての学会発表でした。そのまま大学院に進んで、教授になることを志していました。ただ、いろいろあつて、教授になる道は難しいなと思ったので、ビジネスの道を選びました。

とはいえ、母親だけに稼がせるのは難しいと思い、あらためて学費や生活費を計算すると、このままのペースだと間に合わないとなかった。だから、新しいお父さんを見つけましょうということで、母親と一緒に婚活を始めました。そんな体験をした人は少ないかもしれません。

当時出たばかりの「オーネット」というマッチングサービスを利用して、バツイチの人だけをチェックして、公務員とか大学職員に絞った。僕と母親が面接に行つて、「離婚した理由は何ですか」「年収はいくらですか」と聞いていました。人生をかけた面接活動はその後のビジネス人生でも生きていると実感します。

お相手は一応決まったのですが、その時、僕がメンタルブレイクを起こしました。死別された方だったのですが、ご自宅に伺つて奥さまの写真を見たら感情が抑えられなくなり、母親を一人残して立ち去ってしまった。僕の一人暮らしの費用を負担して

くれるという話ももらっていたのですが、さすがに難しいなと思って、破談になりました。僕が離婚を促しつつ、結婚も促しつつ、またそれは止めろという、すごくわがままな生き方をしてしまいました。お詫びとして、この間、母親に一戸建ての家をプレゼントしました。

お金に困った学生生活だったので、コンビニの廃棄食品を食べていました。本当はやってはいけないのですが、コンビニでアルバイトをしていたので、持って帰らせてもらった。店長に相談して、「いいですか?」「ちよつとだけだったらいいよ」と。売れ残り、かつ賞味期限切れのおにぎりと弁当をかばんに詰めて持ち帰り、自宅の冷凍庫に入れて、解凍して後日チャーハンにして食べるという。あまりお勧めしませんが、コンビニの飯は一生分食べました。社会に出る背景としては、教授になりたいけれど、なるのは難しいし、もっと稼いで母親や兄貴に報いたい、それにいつか自分が成し遂げる世界を見つきたい。そういう思いでサイバーエージェントに入社しました。それから独立して、会社をつくって売ってを繰り返し、今では作家にもなれました。おかげでさまざまなメディアに取り上げられています。



自分のキーワードは何ですか？

ここまでは過去の話です。上場企業の経営をやらせてもらったり、連続的に起業をしたり、ベストセラー作家になれたり。ただ、僕が今日ここに呼ばれているのは、未来に対する志のレベルが比較的高いからだと思っていますので、ここから先は未来の話をします。

今日、この時点で目標は二つあります。新規上場（IPO）と「学問をつくる」ということ。新規上場というのは上場企業になるということです。自分が持っている会社を頑張って大きくして株式を公開する。皆さんが株式を自由に買えるような会社になることを目標として掲げています。

同時に、「学問をつくる」ということがもともと目的でした。ただ、一生かけてやるつもりはなく、四十代までにはいったん完了させるつもりです。来年から塾高で、「卒業研究」の時間を少し借りてビジネス実践講座をやらせていただきます。

ここまでは僕の自己紹介です。かなり長い時間をかけてお話ししましたが、キーワードがいくつかありました。過去・現在・未来と順に整理していくと、

小学生から大学生までは野球漬けだったので、「甲子園」「ピッチャー」「十六年間」、現在はビジネスを中心に「スタートアップ（独立起業）」「上場企業」「M&A」。そして未来をつくる教育に携わって、「IPO」「学問をつくる」「ビジネス実践」を実現したいということ。

でも、ずっとこのキーワードでやるわけではありません。都度改善しながら、ブラッシュアップしています。この作業をぜひ皆さんにもやっていただきたい。自分をつくるというのはこういうことです。

旧来型の慶應義塾出身のエリートは、過去がすごい人が多いです。履歴書を書くとき、めちゃくちゃ格好いいという人が多いですが、「これから先、あなたは何かをするの？」というのが意外とクエスチョンになります。求められたことをやるのはもちろん大事ですが、高度成長期は終わって、失われた三十年が終わったあとに求められるのは、自分が何をしたいかというウイルでしかありません。

だから、今までの先輩方と同じようなことをしても、もう時代が違いますし、独自性がある人や、それこそ異端児しか存在価値が薄くなるので、ぜひ未来に対してのウイルを言葉にしていきたいと思います。急に言われてもやりたいことが分からないという方の

ために、僕が用意したようなフォーマットがありませんので、過去に自分が何をしてきたのか、今何をやっているのか、そして未来は何をしたいのか、書き出してみてください。興味、関心があることでオーケーです。

僕自身、もともとはプロ野球選手になりたいと思っていました。だけど、甲子園手前になって、もつとすごいやつがいると分かった。中学三年で身長が止まったので、これ以上はすごくなれないかと挫折しましたし、教授という道も一度は諦めました。もう一回チャレンジしようと思ったりもしています。未来はどんどん変わってオーケーなのです。

これがこれからの優等生になるための一つのポイントかなと。未来を自分で切り拓くということ。まずは自分を表すキーワードを過去・現在・未来で書き出していきたいと思います。



自分自身を理解し、 自分を超えていく

もう一つのメッセージは、自分を高める方法を持つことです。言葉にすると、そんなことかという感じですが、これがめっちゃ大事です。皆さん生まれてから今の自分になるまで、体は成長してきましたよね。でも、このあとの十年間、身長は大きくなりませんか。体重は変わりますか。そこまで大きな変化はないです。

自分を高める方法を持つというのはそういうことです。体の成長が止まったあとは中身の成長しか求められない。こんなことを言うと、敵に回してしまいう人が多くなるかもしれませんが、学校では、自分を高める方法を教わってこないケースが多いです。

僕は三十一歳と言いましたけれど、ここで四十一歳と言ってもあまり疑問にならないですよ。これが四十歳、五十歳、六十歳を並べても、何が違うかはあまり分からないから。でも、〇歳と十六歳、十八歳を並べると、明らかに成長していますよね。体の成長が止まったあとに、どう自分を成長させるかがとても大事です。

ここから先は、見えない力をいかに見極め、高めるかがポイントになります。一つの方法はメタ認知です。自分自身を理解し、自分を超えていく活動をお勧めしています。メタ認知の詳細はここでは割愛します。

人の見た目は変わります。子供の頃の自分、塾高時代の自分、今の自分、これからの自分。僕も身長は塾高生の頃から変わっていません。百七十一センチ、七十五キロ。体重はちよつと増えていますけれども。身長はどこかで止まります。だから大切なのは見た目ではなく、中身がどう成長しているのか。この先それが問われます。問われ続けます。なので、中身を成長させていく方法を持っていたきたい。

僕の場合、その活動の一つが本を書く、ブログを書くということです。僕は大学時代に本を二冊書いています。出版はしていませんが、自分でブログを書いて、それをまとめて二冊の本にして、準硬式の部室と大学のゼミに置きました。とにかくアウトプットをして、言葉によって自分を成長させる。これはSFCで徹底的に学んだことで、今でも実践しています。本当は「塾高で学んだ」と言いたいのですが、塾高時代は失敗だらけだったので、大学で人格を変えようと思って、そういったステップを踏み

ました。
自分の発信内容の進化は確実に起こせます。これ
を自分の責任でやっていただきたいというのがここ
でのメッセージです。



ルールを理解し、戦略を決める

83
23
5

この数字は、上から順に日本人の寿命、企業の寿命、技術の寿命の平均値を表しています。人間の寿命は今延びています。これから多くの方が入る企業、会社の寿命は短くなっています。実感はありますか。技術の寿命はもっと短くなっています。つい先日、ガソリン自動車は二〇三〇年に停止になり、電気自動車の時代になっていくというニュースがありました。

僕が塾高生の時にはスマホはなくて、ガラケーでした。スマホもしたら十年後ぐらいにまた形を変えるかもしれません。そのくらい技術の寿命はどんどん変わります。今覚えているパソコンのスキルやリモートワークのスキルも、十年後にはまた分からなくなります。これを理解していただきたいということ。簡単に言うと、未来の方が長くなる、長くなり続けるかもしれません。

加えて、人口ピラミッドが変わっています。一九九〇年、二〇一〇年、二〇六〇年の人口ピラミッド

を見比べてみると、日本だけで言えば人口が減りますし、ピラミッドが逆になるので、おじいさん、おばあさんの方が多くなる計算です。

昔は老人の方が少なかったし、インターネットもなかった。情報を持っているのが年上の方々だったから、敬う必然性がありましたが、今は若い人の方が少ない。相対的に若者の方が希少価値が高い。未来をつくる存在であるため、本来、電車の席を譲るべきなのは子供ではないかと僕は常々思っています。それぐらい子供が貴重な存在になっていく。

慶應義塾が創設された明治初期から、ヨーロッパに追いつけ、欧米に追いつけで平成初期まで、戦後を挟んで世界トップの国になっていき、当時は最先端であったと思います。しかし、そこからGDPの成長、人口増加は止まり、失われた三十年の平成時代を過ごし、今は令和になっている。

文化的にも洗練されていて、今は成熟期を迎えています。世界的には先進国でも成長し続けているアジア諸国はあると思いますが、日本はいち早く成熟期にいかにか持続可能な発展を実現させるかという課題に直面している。先ほど教員の方とも話しましたが、慶應義塾という組織でさえも成熟期に入っていて、この先どうするかで諸先輩方は悩んでいます。

それくらい日本も慶應義塾も最先端に行きすぎていて、前例がない、先行き不透明な未来をいかに切り拓くかという問いと闘っています。皆さんが社会に出る時には、この課題真っ盛りですね。「この先ネットが伸びるぞ」ではなくて、テクノロジーを活用してどう時代をつくっていくか、成熟期に特有の問題とどう向き合うか。人口分布が変わって、ほとんどの人が高齢者になった時代に自分はどう未来をつくっていくのか。これを問われている。そういった背景を理解していただきたい。

つまり、ルール理解ですね。ルールと戦略性です。今はリモートの授業がありますし、今回の動画も上がるかもしれませんが、どこにいても学べる時代になっています。塾高にしなければ学べない授業はどんどん減っていきます。大学が顕著ですね。慶應義塾大学にいらなくても、聴講することができてしまう。学校教育の垣根が急激に溶けてきているわけです。

すると、今までは学歴が尊重されていましたけれども、例えばフォロワー数や人脈など違う尺度で測られる、比べられるようになる。これがルールの変化です。慶應義塾には違う価値はあると思いますが、学歴が高い・低いではなく、そういう側面がだんだん変わってきているということをちゃんと理解して、

来るであろう未来を想像し、そこから逆算した戦略を持つ。逆算が難しければ、自分の手で未来をつくり出す。これが一番確実です。人生、何年生きるかでどこで活躍するかという仮説を立てる。いろいろと話はありますが、志だけは高めていただきたいと思います。



あと何日生きるのか、逆算してみる

皆さんが今まで生きてきた日数は六千日前後かと思えます。十五歳、十八歳、人によつては二十歳ぐらい僕は「なぜそんなにモチベーション高く頑張れるんですか」とよく聞かれるのですが、それは目標設定しているからです。目標設定には期日がセットです。実は何日生きるかということをおおよそ決めています。

まず、独立したきっかけは父親の死でした。六十歳で亡くなりました。祖父も六十歳びつたりで亡くなって、じゃあ自分は何歳で死ぬんだと考えた時期がありました。人生に限りがあるのであれば、自分がやりたいことをやりたいし、残せるものを残さないで生きた価値がないのではないかと思つた。

六十歳で死ぬとしたら、あと一万日とちよつとなんですね。一万円札を全部一円に替えて、一日一枚ずつ落としていく感じです。一日を生きたとは、残りの人生から一日を消費するということです。これを決めるのはすごく怖いと思いますけれども、日数の推定はできるはずですよ。塾高生活を一年、二年単位で考える方は多いと思いますが、あと何日通うのか。急がないといけない理由は人によつては出るか

もしれませんし、もう一年いようかと思う人もいるかもしれません。それは全然止めません。

話を整理します。自分を高める方法を持っていますか。例えばメタ認知。それからルールを理解していますか。社会的な背景とか、これから先、皆さんが求められる課題は何かを理解していますか。そこに戦略性がありますか。

そして、志の高さだけは絶対に負けないでほしい。今の実力では勝てないかもしれないし、経験では諸先輩方には勝てないかもしれないけれど、志の高さではいつでも勝てる。勝ち負けの問題ではないですが、下げることはいつでもできるので、低いよりは高い方がいい。そういつた志を自分の言葉にしておきましょう。いきなり出ないかもしれないし、変えてもオーケーですよ。

塾高で一番になるでもいいし、この分野では絶対に負けない、部活の中でこれだけは負けないというでもいいと思います。言葉にして志を手にも、生きればいいのではないかと思っています。そして今日のゴールは「問いをつくる」です。このきっかけにできればいいなと思つて、僕の話が終わらせていただきます。このあと質問をいただければと思います。ありがとうございます(拍手)。

一年生の気持ちで取り組む

生徒A（三年） 自分は高校時代、ファーストとしてスタメンで出させてもらっていて、大学野球部の体育会に入らせていただいています。大学からピッチャーとして新しいことを始めるのですが、福山さんは新しいことを始める時、どんなことを心がけてやっていましたか。

福山 野球部の人がいたんですね。うれしいです。一年生の気持ちで取り組むということかもしれません。社会に出たあととずっと同じことが続きます。新しい仕事になったり、今回のようにリモートワークにチャレンジすることになったり、新しいことはこれから先もあり続けます。

活躍を続ける人は常に謙虚にことに向き合います。新鮮な心持ちは気づきを生みやすいからです。反対に、「慣れた」視点は気づきづらい自分になってしまいます。いわゆるマンネリです。そんな時、新入りのメンバーにごもつともな指摘をされると、イラッとしてしまう。それはもったいないです。新鮮な気持ちは強みになります。

野球部の場合は、毎年ルールが変わることはない

と思いますが、野球以外の世界に行った時に、結構毎年ルールが変わります。慶應義塾の学校運営さえ、言ってはいけないことが毎年増えています。今日は際どい発言をしているかもしれませんが（笑）。それぐらいルールというものは少しずつ無難な方向に行ったりするし、社会もガラッと変わったりする。「俺はこれまでこうやってきたんだ」というものをいったんなくして、「初めてなので、教えてください」というスタンスで受けるのがいいと思います。

もう一個加えると、自分自身が自分に教えるということを続ける。人に教える人が一番学ぶ。塾講師や家庭教師をしたことがある人もいると思います。今日もこの場で一番学んでいるのは僕で、話している人が一番学びます。

野球も同じで、学生コーチが一番学んでいる。何なら監督が一番学ぶ。教える人が一番学ぶので、自分自身に教えることを繰り返していくと、いろいろな新しいチャレンジができて、他の人よりも倍速で成長できると思います。

目標を言葉に出して、 自問自答を繰り返す

生徒B（二年） 志を高く持つというお話がありました。福山さんはどういうきっかけで高い志を持つようになったのか、お聞きしたいです。

福山 きっかけは塾高野球部時代です。中学校の頃に日本一になっていたのですが、高校でまさか日本一になるとは正直思っていなかったですね。一年生の頃はエースになればいいな、くらいの感じでした。

ただ、それを乗り越えて、上田監督をはじめ、野球部の諸先輩方が「慶應は日本一を目指すんだ」と言い切ってくれた。最初は半信半疑でしたが、やっていくと、だんだん近づいていく実感を得た。これが一番の原体験です。言ってみるもんだなど。しかも言葉にすると、日本一を志すチームとして今やっていることが合っているのかなという自問自答が生まれるんですね。

「問いをつくる」という話をしましたね。「日本一を志すチームとして、グラウンドの整備はこの甘さでいいんだっけ」「集合時間がこの時間でいいんだっ

け」。いったん日本一と決めたら、一番を目指す人としてあるべき姿、あるべき発言ができているかというのを自問自答するようになった。そこから高い志を持つ、高い目標を持つことが癖になっていきますね。

もう一つは、悔しかったから。塾高の友達には、今でもすごい人はたくさんいます。野球でも勝てなかったし、勉強でも勝てないし、悔しいんですよね。どこで勝つんだ、みたいな。それで悔し紛れに「じゃあ、目標だけは負けない」と思ったこともきっかけかもしれないですね。

ただ、「学問をつくる」という目標を定義できたのは二十八歳の時。塾高を卒業してから十年後です。それまでは「日本一売れる営業マン」とか、ああでもない、こうでもない、いろいろな言葉を書いていました。書いて、宣言して、いろいろと活動し、もがいてみて、違うなと思ったら変える、みたいなことをやっていた。

今は「学問をつくる」と言い切って、その目標に向けて現実化してきているかな。達成したらまた変えますし、達成する直前で、また志をもう一段上げようと思います。

逃げることも大事、得意分野で成果を出す

生徒C（三年） 小学生から野球を続けていますが、いずれ辞める時が来て、新しい何かを始める日が来るとは思います。福山さんは作家や起業など、新しいことを始める機会が多かったと思いますが、新しい世界に入っていく時に思っていたことや心がけていたことはありますか。

福山 「次こそレギュラーになりたい」ということでしようか。僕はベンチを外れた経験があるので、何とかしてベンチに入りたい、レギュラーで出たい、エースとして出たい。そういう気持ちを今も引きずっている可能性が高いです。社会というフィールドにはさまざまなチームや会社がありますが、その中で一番手として選ばれる存在でありたい。今日のような場と呼ばれる存在でありたいと思っています。ピッチャーとしては二番手にしかなれず、違うポジションに行かないと一番手にはなれなかった。そういうことの連続が今の仕事につながっています。会社もつくって、売却はしますが、自分だけだと、ここから先の試合は成立できないと思った時にバトンタッチをする。そして自分は違う仕事をしよう」と

ポジションを開拓しているのが実情です。

ただ、逆説的に言うとも、自分の得意分野だけで結果を出すということが続いている。新しいことをしているように見えますが、僕の中では逃げています。プロ野球選手になれなかったから教授になりました。教授になろうと思ったけれど、諦めてしまったからプロのビジネスマンになろう。そして起業家として、すごい社長になろうと思ったけれど、考えれば考えるほど難しいから、教育の道で「学問をつくる」。あ、これ、意外といけそう、というのが今です。もしかしたら、来年は諦めている可能性もあります。今はそこでいったん突き進んでいます。

いろいろな実績も出してきましたが、新しいことをやるというよりは、結構逃げている。言うのは恥ずかしいですけれども、全然逃げていいかなと。ポジションもありますよね。大阪桐蔭から来たすごいやつがいるからどうしても出られないとか。そうしたら違うポジションに行く。フィールドだけではなく、学生スタッフとして活躍することも一つの道かもしれません。本来、一つのポジションを争うよりも、自らポジションをつくることの方が合理的です。自分が輝ける舞台をつくり、自分を守っているのかもしれません。

志は大切に、人脈はほどほどに

生徒D（三年） 小学校からずっとサッカーをやっています

スタメンを取られて悔しい思いをするというのは、スポーツという面ではサッカーも共通だと思いますが、ルールなど異なる部分も多いです。野球をやっていて、良かったと思うことはありますか。

福山 野球に例えることが得意になったということですかね。野球で百四十キロ投げる力は活きたかったです。野球で高みを目指すこと、日本一を目指すということだけは残りました。バッティングも好きで、高校時代はピッチャーながら四本のホームランを打つことができました。でも、その力はバッティングセンターでしか生きないですね。

ただ、野球を通じて日本一を目指す、野球を通じて「目標設定・達成力」「問題発見・解決力」、この力だけ残りました。本当に日本一になるためにこのレベルでいいのかということを厳しくディレクションする力だけが残ったという感じです。

ちなみに、準硬式の学生コーチ（監督的役割）という職種を自分でつくったのですが、大学野球部の

学生たちにも同じ話をしています。野球を続けてプロに行く人もいますが、どこかのタイミングで違う仕事をやった時に、野球をやっていてよかったと思えるような活動の仕方をしてほしいです。その一つがアウトプットで、ブログや日記、YouTubeでもいいと思います。これを続けていくと、競技力は残らないですが、自分を高める方法論は自分に残せると思います。

人脈は、塾高の友達をあまり引きずらない方がいいと僕は思っています。もちろん大事な仲間ですが、「塾高の時、一緒だったから、一緒にやろうぜ」とみたいなのはちょっと危険です。それは大学に進学しても一緒です。「同じ部活だったから」というのは、いい意味では仲間ですが、悪い意味では自分が行こうとすると、足を引っ張られるケースもある。人間には同調本能があり、普段接する人の考え方に自然と似るものです。

それはそれ、これはこれ。人脈とは掛け算です。まず自分自身ができることを整理し、その実力を高めること。その先に塾高時代の仲間とコラボできれば、それは幸せなことだと思います。

逃げないと見つからない

「やりたいこと」

生徒E（三年）

僕は三年生で、この夏で部活を引退しました。正直やることがないというか、部活ロスになっています。具体的に新しくやりたいことを見つける方法を教えていただきたいです。

福山 一つは逃げることです。今やっているとこ
ろで駄目だったら、それを止めること。僕も同時に
複数やっているように見えるのですが、「勝てない」
「自分には向かない」と判断したら、一つ一つ切り
捨てて生きているので、選択と集中です。彼女と別
れてモテようとするのを止めた時の話も同じで、
止めることが最初のステップだったりします。そし
て、時間的にも精神的にもを空きをつくることです。
次は、「あ、これ、俺にもできそう」ということ
を見つけることかもしれません。僕だったら、本を
書くこと。書きたいと思ったら、書いている人にど
うやったら書けるのか、話を聞く。会社をつくりた
いと思ったら、つくっている人に「どうやってつく
るんですか」「どうやって会社を売るんですか」と
ちゃんと聞いてみる。

それで、できそうと思ったらやればオーケー。で
きないと思ったら諦める。ユーチューブを見て、
「この動画、面白いな。俺にもできそうだ」と思っ
たら、やってみる。やっている人に話を聞く。でき
そうだと思うたら突き進む。できないと思ったら諦
める。

諦めることが大事です。諦めて捨てていかないと、
選択肢を絞れないからです。おおよそ、皆さんは広
い選択肢を与えられてきたと思います。おじいちゃ
ん、おばあちゃん世代からさかのぼって、戦後間も
ない時は選択肢が少なかったので、子供のためにど
うにか選択肢を広げてあげたいというのが親御さん
の思いだったと思います。僕の親もそんな思いが
あったようです。

だけど、広げられすぎて、みんなやりたいことを
絞れていないというのが僕の所感です。やれるこ
とが多すぎる。学部だって選べるから迷ってしまう
のではないかと常々思います。皆さんのアンケート
を見ても、すごく思いました。選択肢の肥満児に
なっているなど。

僕は成績的にSFCしか行けなかった可能性もあり
ます。大学を辞める選択はありました。しかし、
母親に辞めるなと強く言われた。お金もなかったか

ら、稼ぐしかないみたいな感じでした。どちらかというと旧来型、昭和型の生き方で、これしかないからやりました。

皆さんは選択肢が広すぎるので、迷うのだろうと思います。そこは先人の知恵を借りて、僕にはこれ以上の逃げ道がないというところまで逃げ切ると、おのずと選択肢は絞られると思います。



ルールを理解して、タイミンングを押さえる

生徒F（三年） 学歴で就職が決まることなく

なっていくというお話がありました。おのずと価値観が変わっていくことだと思いますが、自分たちの意思で社会の価値観を変えていくことは可能なのか、教えていただきたいです。

福山 自分たちの発信で社会の価値観を変えていくこと。結論、できると 생각합니다。ただ、そこにはルールの理解が必要です。野球もビジネスも学校運営も、すべてルールがあつて、しきたりがあつて、積み重なった価値観があります。それをちゃんと理解した上で、ここを変えればすべてが変わるぞという、オセロで言えば、四隅を押さえることが大事だと思います。

「学問をつくる」というのは、よく分からないかもしれませんが、僕の中では科目をつくる、授業をつくるということです。これをつくるためにはどうしたらいいかと逆算して、因数分解をしていくと、まずはコンテンツが必要だな、それからこれを学校に届け出る必要があるなど。

実はいろいろな大学に「営業という授業をつくり

ませんか」と営業をしたのですが、なかなか決まらない。そうか、大学教授に提案しても、自分の仕事が奪われるだけだからなかなか通らないのだろうと思って、次は創設者か理事長に絞って提案したら、「オーケー、やろう」と大学院での単発の講座が決まりました。そのあとに代々木ゼミナールでやらせていただいたて、来年からは塾高でやらせていただくことになった。

これは意思決定者を押さえられたからです。「この人は決められるぞ」という人を決めた。まず事例をつくる。事例が事例を生んで、そこからさらに営業をして、「先行事例がありますよ」という状態をつくる。そのあと何年かに一回、義務教育の科目が変わるタイミンングがあります。だいたい四年から六年だと思っています。プログラミング教育は義務教育になつていますよね。体育にダンスという科目が入ったり、少しずつ義務教育は変わっているんで、変わるタイミンングで、文科省に政治家経由で提案しよう。そこまで逆算しています。

その先に学問をつくって、福澤諭吉先生から渋沢栄一先生へ、それから福山へという形で一万円札の顔も狙っています。お札の顔が変わるタイミンングも逆算して、そのタイミンングでアプローチするには何

が必要かということも一個一個考えています。

あと、運の良さもあると思います。運の良さがあるものにはベットする、ゲームを増やす。今僕がやっていることです。教育だけでなく、ビジネスにもベットしておく。両方がちゃんと進むことによつて実現しやすくなる状態をつくっています。ビジネスを学問にするのだったら、自分がビジネスとして第一人者である必要がある。昔、上場企業の役員でしたが、それだけでは足りないので、自分でつくった会社を上場させることもやってやろう。これはやって損はないから。競馬と一緒にですね。いろいろとベットしていけば、どれか当たれば成功する。先行き不透明な時代では合理的な方法です。

話題が広がってしまいました。まずルールの理解がとても大事です。誰がこの国をつくって、誰がこのルールをつくって、誰がこのチームを率いているのか。誰が意思決定して、いつのタイミングで意思決定されているのか。これをちゃんと分解すると、意外と難しくないと思います。分からなかったら、いつでも相談してください。



悔しかったことは即効で解決

生徒G（二年） 福山さんは新しい道に、志を高く持つて挑戦されていると思います。自分がやってきた中で後悔はありませんか。

福山 後悔はありませんが、反省は都度行います。今日、講演が終わったあとも、「この話はしなければよかった」とか「このポイントをもっと伝えるべきだった」とか、動画を全部見て振り返るのですが、これを毎回繰り返し返しています。おそらく、未来への興味が過去の失敗を常に上回っているのだと思います。

僕は本当にどんくさくて、野球でもピッチャーしかできないくらい不器用でした。一個一個つぶしていくというか、改善しながらやっていますので、これでも話すのはうまくなった方です。一個一個の「やってしまった」を改善する。失敗してしまっことはほとんど忘れてしまいました。悔しかったことは、即効で解決しています。

同時に複数の目標を追いかけて、いろいろな肩書で一人何役もやっている、悩んでいる余裕はないです。ずっと引きずるというより、何とか形にして自

分の中で収めていくということが続けている気がします。

塾高の時、野球部でベンチを外れてすごく辛かった。三カ月だけ付き合った彼女が夏の大会に応援に来てくれたけれど、僕はベンチに入っていない、同じスタンドで応援していたという。めちゃくちゃ屈辱だったんですけれども、大学で活躍して見返そうと思って野球部で勝つとか、学会発表するとかして、その都度自分の気持ちを収めてきました。悔しい気持ちを消し去るのではなく、バネに変えていけると、挑戦が続けられるのかもしれない。



感情を引き出すスイッチを持つ

生徒H（二年） 福山さんはいろいろなことに挑戦されてこれましたが、壁にぶつかった時に志を高く保つ方法を教えてほしいです。

福山 そうですねえ。悔しかった時の写真を見たり、音楽を聴いたりしていますね。僕は塾高の時から一番悔しかったので、その時に聴いていた曲を聴いて、ウォーッみたいな感じです。すごいガキっぽいですね（笑）。

でも、そんなもんです。論理立てて話すことも好きですが、やっぱり感情なんですよ。感情で「やってやるぞ」とか「悔しい」を引き出すカード、そのスイッチをいくつか持っている可能性はあります。音楽、言葉、風景ですかね。感情は大事じゃないですか。やる気がないと動かないので、それはあるかもしれません。あとはよく寝ることですね。

目標や志は意外と脆いものです。辛いことや壁にぶつかると、自分の都合に合わせてしまいがちです。お勧めは、スマホの壁紙に設定して、毎日百回以上見続けることです。思いを可視化し、毎日目に入れることで自分自身を洗脳できます。独立してからは

僕自身、これが続いています。逆説的ですが、志が低いとどうでもいいようなことに腹を立てたり、気持ちを左右されてしまいます。志を高めることで、そんな悩みはどうでもよくなります。



頑張っていないくても褒められること、

それが強み

生徒Ⅰ（二年） 今まで野球をやってきて、野球も勉強も中途半端でした。今まで周りに流されて普通に人生を送ってきて、得意なものありません。得意なものを見つける方法を教えていただきたいです。

福山 二つあります。一つ目は、徹底的に他人と比較することです。他人と比較して自分が劣っている部分、秀でている部分を明確にした方がいいですね。「比べるものじゃない」と言いますが、比べた方が分かります。塾高という環境は社会の縮図で、本当にいろいろな人がいるじゃないですか。そこで人と比べまくって、自分は何なら負けないのか。これを探すことです。

二つ目は、自分の得意分野や強み。どう見つけるかというと、自分が頑張っているつもりがないのに、人から褒められること。これが強みです。野球に例えると、僕はピッチャーを頑張っていたのですが、球は全然速くないし、コントロールも良くなかった。でも自分では頑張っているから、「ピッチャーをやっています。ピッチャーが得意です」と言いた

い。けれど、本当に得意だったのは実はマネジメントでした。大学の体育会時代、学生コーチとして就任二年目でリーグ優勝に導きました。もちろん運もありましたが、自分がピッチャーを務めるよりもはるかに楽に結果を出すことができました。頑張っているつもりがなく、結果が出せた。この時の成功体験は、社会人一年目から会社の経営を考えられる視座の高さにつながりました。

科目やアルバイト、文化的な活動、バンドもそうかもしれませんが、頑張っていることと得意なことは結構食い違います。若い時期に頑張っていることと得意なことが一致した人はすごく評価されて、高校時代から全国大会へ出場とか、日本代表とかになります。それは稀です。

今違ったなと気づけていることが一歩、アドバンテージなので、徹底的に比較する。野球部なら野球部でいいので、その中で自分は何が得意かを見つめる。見つからなかったら、言ってもらおう。「はい、皆さん、アンケートを配ります。僕が得意なことは何でしょう？」と聞いてみましょう。すると、言われたことの方がヒントになると思います。得てして自分が頑張っていることが得意でなかったりすると思います。参考にしてみてください。

徹底的に墮落してみる

生徒J（三年） 自分は高校野球を引退して、こ

れからどうするか自分でもよく分からず、ボーッとしながら過ごしています。まだこれから何にチャレンジするか決めていません。福山さんは大学生になつてから考え方が変わったことですが、引退後は何を考えて、どういう行動をしていましたか。

福山 それなら、徹底的に墮落した方がいいかもしれないですね（笑）。結構リアルなアドバイスだと思います。今まで意識高くやってきた人はどこかで休憩しないといけないのではないかと。これは学生だけではなく、社会人もそうですが、一日でもいいから、一度うんと墮落する。「これじゃ、まずい」と思ったら、たぶん勝手に見つかるんじゃないかな。見つからなかったとしても、いったんアルバイトならアルバイトで、このチームの中で一番になろうとか、そういうことができると思つかる可能性があると思います。

志を高くと言っても、「それは単純に目標が高いだけじゃないですか」というケースもあります。が、やりたいことが分からなかったら、「いったん一番

を目指してしましよう」というのが僕のお勧めのメソッドです。野球もそうですが、「日本一になりたい」というのはもちろんきれいな事なんですよ。

本当はベンチに入りたいし、試合に出たい。やはり試合に出ないと、心の底から日本一とは言えないですよ。これから先、いろいろな仕事やチームに入ると思いますが、その中でいったん一番を目指さないと、その先の未来は見えません。本当にやりたいことをやろうとすると、実力、権力、動かせるお金の大きさが必要だったりします。分からなかったら、とりあえず偉くなる、実力を付ける、資格試験を受けるで全然いい。いったん上を目指した方が、やりたいことが見つかった時にできる自分になっていると思います。だから、今うじうじ悩むのは無駄です。悩むというのは暇だからできる技なので。忙しかつたら、悩む暇なんてないですよ。

何年かかっても達成できるかが分からない高い目標を掲げた瞬間に、もう一生、忙しい人生しか待つていないのは事実なので、今悩めるのはチャンスだと思います。一回墮落して、このままじゃいけないということに気づいて。今いる環境でまずトップを目指そうと思えたら、たぶん拓けるのではないかと思います。

本音を話す、嘘をつかない

生徒K（一年）

福山さんはたくさんさんの新しい事業を始めたり、著書を著したりしておられます。何をやるにしても一人ではなくて、周りに信頼の厚い方がおられると思います。そこに太い人間関係のパイプがあつて、いろいろなことに成功されていると思います。人間関係の築き方、信頼の獲得の仕方があれば教えていただきたいです。

福山 本音を話すことだと思います。今日もカメラスタッフが何人か来てくれています。基本的に僕は嘘をつかないです。率直な思いを伝える。僕がやりたいのはこういう世界で、皆さんもやりたいことがあるなら、それを追いかけましょう、それでたまたま今交わるのだったら、一緒に仕事をしましょうと。

そこがぶれないというか。嘘をつかないようにしている。勘違いされることも誤解されることも多いですが、都度言うことを変えてしまうと、何かほころびが出た時に一気に信頼を失ってしまう。失った信頼を取り戻す方が大変だと思います。だったら、全部本音でいこうという形でやっていますね。

あと、やはり人脈はあまり大事にしすぎないというのがこの時代は大事だと思います。いろいろな人に出会える時代になっているんですね。昔はインターネットもないし、スマホもないし、ポケベルで待ち合わせをするような時代においては、慶應義塾の仲間は価値が高かったはずです。

ライトですけれども、今は簡単に信頼をつくれます。ツイッターで趣味でつながるとか、マッチングサイトの中でつながるとか、簡単にできてしまう時代なので、その都度、自分が本音で話せるスピード、本音を引き出すスピードの方が大事です。これはテクニクではなく、いつも本音で生きているということが最大のアドバンテージになると思います。

今の人脈や今の関係に甘んじず、自己紹介のキーワードを整理し、初対面の人に堂々と発信しておくことです。僕は教育をやりたい、学問をつくりたいと言っているから、そういう人と出会ったり、チャンスを得たりします。

でも、それを言わないで「今までの塾高の仲間がいるからさ」「野球部の友達がいるからさ」と甘んじてしまうと、未来が切り拓けない。ここはすごく大事なポイントです。僕よりもっと上の諸先輩方は「いや、今でも塾高の仲間と毎週飲んでいるよ」と

言いますが、それはちょっと大丈夫かなと僕は思います。

自分自身が進化していますか、自分の進化を止めていませんかと僕は常々感じます。それで野球部のOBの方から批判されることもありますけれども、僕はそう思っています。次の時代は目的に応じていかに素早くチーム組成できるか。これが問われます。自分自身が進化したら、人脈は変わってきます。

未来でやっていきたいことはこれなんだということとをちゃんと伝えられるかどうかが大事です。「僕は塾高出身です」という、過去の話をしたからといって人脈はできません。これは断言します。自分がやりたいことでしかつなげない時代にもうなっているのです、ぜひ皆さんは未来を、「私はこれをやりたいんだ」ということを言葉にして、名札にするくらいにしていただきたいなと思っています。



「慶應出身」の肩書を言わない生き方

生徒Ⅰ（三年）

福山さんは新卒でサイバーエージェントに入社されて、安定しているサラリーマンになれたと思います。お父さんも目の前で経営に失敗して、苦しい思いをされたと思います。それにもかかわらず、将来が安定するか分からない起業に踏み切った、一番の決め手は何ですか。

福山 当時二〇一〇年、二〇一一年のサイバーエージェントはまだまだ不安定な会社で、慶應の体育会からサイバーエージェントに行くのは初めてでした。今は「AbemaTVの会社」というと、だいたいわかる時代になっていますけれども、当時はドベンチャー企業で、「おまえ、そこに行つて大丈夫なの？」と言われました。

当時のサイバーエージェントは、ネット上では全然いい噂がない会社でした。僕の中では「社長になりたい。だけど、すぐにはできない」。なぜなら野球しかやってこなかったから。なので、社長になる最短の手段として、サイバーエージェントを選びました。そこで子会社の社長と経験を積んで、いざれ独立しようというのが僕の戦略でした。そのとお

りになりました。だから、実はチャレンジしたいけれど、今すぐには起業できない。そこで甘んじて入社させていただいた会社というのが実際のところ。入社面接時にもそれを話しています。

なぜリスクを取ったのか、安定を選ばなかったのかということですが、逆ですね。僕は安定を目指すために、自分に実力をつけようと思いました。会社におんぶに抱っこにならない方が先の人生は安定するのではないかと。そう僕は思っていましたし、たぶんそうなっています。

先ほど話したとおり、百年生きる皆さんにとって、会社の寿命は短くなっている。慶應はなかなかつづれない組織体ですが、会社は簡単につづれます。M&Aで合併されたりして、なくなります。そうなる、一生一社でいることはほありません。皆さんのお父さん方もまさにその瀬戸際に立たされている。もしかしたらリストラを勧告したり、されたりしている方もいるかもしれません。

当時の大企業がだんだん成熟期を迎え、衰退している中で、その会社に飛び込むのは、当時は「安定」と言われていましたけれども、僕は違うと思っていました。会社の看板を言わないと、自己紹介ができない大人になつては駄目だと。今日、僕は自分

の会社の名前を一切言っていないんですが、「福山です」という生き方をこの時にしようと思ったんですね。

「福山です。たまたま今やっている会社はこういう会社です」という形で生きていこうと決めてしまいましたが、怪しいと言えは怪しいですね。「え、会社名はどこですか。どの会社なんですか」と言われることもあります。皆さんで言えば、塾高という看板を外すということ。慶應出身という肩書にすぎらないように生きていこうと思いました。出身は過去の話ですし、何より他国で通用しない。それが自分の未来をつくることにつながると思います。このままでは駄目ですが、おおよそ仮説どおりになっってきている気はしています。つまり安定を自分の中に持ち、自分の外に持たないようにした、というのが答えです。



やりたいことが明確な人の右腕になる

生徒M（二年） 新しいことを始めようと思った

時に、何を使えばいいとか、こういう手段を選べばいいとか、ツールみたいなものは見えているけれど、具体的に何をしたらいいのかわかりません。

例えば今日は写真部で講演の写真を撮らせていただいたのですが、カメラはあるけれど、どんな写真を撮ったらいいか分からないとか。手段やツールは見えているけれど、具体的に何をしたらいいかわからない時、福山さんだったら何をしますか。

福山 やりたいことが明確な人の元に付くことですね。右腕になる。事実、僕もそうしました。最初からやりたいことなんかないですよ。そもそも皆さん、自分の意思で生まれてきたわけではないので、なくて当然だと僕は思っています。

ただ、心のどこかで「やりたいことを見つけたいな」とか「『これを目指しています』と言いたいな」と思っているのは正しくて、それは見つけた方がいい。だけど何もヒントがなければ、おっしゃるとおりで、カメラだけ買ってどうしようとなってしまうですね。そんな時はやりたいことがめちやくちや明

確な人の元に行って手伝う。手伝うと、どこかで価値観がずれるんです。「あ、この人のやりたいことって、正しいけれど、僕がやりたいのはちょっと違うな」と気づいたら、そこから明確にすればいいと思います。やりたいことは言葉にして初めて気が付きます。その言葉と出会うために人と会ったり、本を読んだり、組織に入ることはいいと思います。

つまり、言葉を否定していかないと、自分の価値観って見えてこないものです。白紙の紙を渡されても、なかなか書けないじゃないですか。「将来の夢？ 分からないな」となってしまうので、先輩なのか同僚なのか、もしかしたら後輩かもしれないんですが、明確な人の元に行ってギュッとしがみつくと、意外と自分の価値観が見えてきます。

だから、カメラのチームにやりたいことがある人がいたら、その人の言うことをいったん信じるとか。諸先輩方に話を聞きに行って、「何か手伝わせてください」でもいい。ウイルが明確な人の元に行った方が、自分のウイルがにじみ出ると思います。

これから先は一生「文武両道」、 兼部でオーケー

司会 最後に、私からも質問をさせていただきます。最後、私から小学生の頃に二年間だけ、横浜市の野球チームに入っていたことがあります。走ることは得意で、ちょっとだけ打って走塁を頑張るみたいなやり方をしていましたが、あまりセンスがなくて、なかなか続けることが難しくて。

今まで生きてきた中で、一つのことにとこだわるという、福山さんのように野球一本で頑張っていくことは、自分にはあまり向いていなかったというか、いろいろなことを少しずつやっていくところ、今部活を兼部しています。山岳部と日吉祭実行委員会と生徒会の三つをやっている、他にも学校の外で活動しています。

社会ですでに活躍されている福山さんの目から見ると、そういった生き方をしている人間をどう思われるのか。見解をお聞きたいと思います。

福山 たぶん僕の息子にもそうさせます。野球部一本にはしてほしくないですね。なぜかというところ、世の中の構造が変わってきているからです。人口が

減っているのに経済規模をキープしようとしたら、一人が二つ、三つのポジションをやることは当たり前です。野球でいうと、七人しかいないのに試合をしないといけないから、センターがレフトとライトをやらなければいけないですね。

もう兼部する時代になっているから、自分の息子にも確実にさせます。個人的にはロックバンドを目指してほしいんですけども、同時並行で会計の勉強や起業もさつさとさせたい。それが求められる時代だからです。

たくさんいただいた質問の中に「文武両道」というキーワードがありました。これから先の人生、一生文武両道です。それをやらなければいけないです。文武が何かは分からないですけど、いろいろと兼ねながらやらなければいけない時代は来ています。求められることは減らないのに、やれる人が減っているこの時代においては、一人が複数のポジションをやることは当たり前です。こういう運命だと思う方がよいと思います。

加えて、ビジネスって仕事だけではないですよ。野球も仕事だと思います。うちの奥さんがやっている家事も、お金は出ないですが、立派な仕事です。子供も幼稚園でお絵かきや塗り絵をやっています。

れど、これも仕事です。ファミリワーク、ホームワーク、僕がやっているのはビジネスワーク、アカデミックワーク。

ワークというのは同じですが、いろいろな仕事がある。ベーシックインカムの議論などありますが、日本はすでに弱者を助ける社会構造です。その先は、一生懸命ビジネスをやらなくても、生きていける時代が来る。AIの発展によって、やらなくてもいい仕事が増えていく。ベーシックインカムの普及によって弱者が救われる。つまり、日本って、野垂れ死ぬ人がその辺にいないのです。

それぐらい弱い人には強い国です。お金持ちからはすごい税金を取っていますけれども、そうやって国を強くしてきた背景があります。われわれが生きていく社会は、お父さん、おじいさん方と同じくらい働かなくてはいけないかという、そうではない。むしろ自分のやりたいことを追求していくことが求められる時代だと思います。

一つに絞ることも美しい生き方ですが、求められることが増えているのだから、人口が減っている観点でいえば、複数やってオーケーだし、複数やれる時代になっている。一つの授業を受けながら、チューブで他の授業を聴くこともできるし、部活で

ランニングしながら音楽を聴く、授業を聴くこともできる。

そういうテクノロジーの発展があるので、実は同時並行ができる時代なのです。同時並行できるのに怠けているのはヤバいんじゃないかと思います。兼部できるのなら、そのまま突き進むのがいいかと思います。



おわりに

司会 自分自身、今すごく大変な世の中になってきている中で、どういうふうに進めばいいのか。すごく不安に思っている人がここにもたくさんいると思います。今日はこの場で生のご意見をいただけて、素晴らしい会になったのではないかと思います。本当にありがとうございます。

本日の講座終了後には、マイクロソフトのFormsで感想を募ります。ぜひそちらについても、皆さんからの回答をお願いします。

福山さん、本日はお忙しい中、母校に足を運んでくださいました、本当にありがとうございました。

福山 僕は手を挙げるタイプだったので、手を挙げてくださった方は素晴らしいなと思います。今日この場は皆さんとの出会いの場ですので、みんなの前で聞けなかったことがあれば、YouTubeやツイッター、インスタグラムからDMをください。一緒にいい未来を築いていければと思っています。これから先、よろしくお願いします。今日はどうもありがとうございました（拍手）。

司会 ありがとうございます。大きな拍手をお願いします（拍手）。

最後に、古田校長先生より一言お言葉を頂戴したいと思います。

古田 福山さん、本当に今日はありがとうございました。お忙しい中、貴重な時間を頂戴しましたこと、それから高校生に対して素晴らしい機会を提供してくださいましたこと、あらためて御礼申し上げます。

生徒諸君は福山さんのお話からいろいろな気づきや学びを得たと思います。大切なのは、それをこれから君たちが生かしていくことです。この場限りで聞いておしまいではなくて、聞いたことを自分の将来にどう生かしていくか、どうやって活用していくか、こういったことをぜひ考えてください。そのために福山さんの話をそれぞれが何回も振り返ってほしいと思います。

最後にもう一度、福山さんに対して、大きな拍手でもって感謝と御礼の気持ちを伝えましょう。福山さん、ありがとうございます（拍手）。

■2020年度 将来展望講座（第10回） 実施記録

実施日時：2020年12月9日（木）15時15分～16時50分

会場： 慶應義塾高等学校

日吉協育棟 創造館4階 日吉協育ホール

交流館2階 コミュニケーションラウンジ

講師： 福山 敦士 氏（作家／キャリア教育研究家）

テーマ： 「未来からの留学生に贈る

これまでの優等生 これからの優等生

～平凡な塾高生のための逆転術～」

主催： 慶應義塾高等学校、慶應義塾高等学校同窓会

協力： 慶應義塾高等学校生徒会

慶應義塾高等学校フォトフレンズ

参加人数：約160名

2020年度慶應義塾高等学校将来展望講座

2021年3月25日発行

発行・編集

慶應義塾高等学校

〒223-8524 横浜市港北区日吉4-1-2

TEL 045-566-1381

URL <https://www.hs.keio.ac.jp/>

制作

テープライト株式会社

制作協力

株式会社スタジオヤマト

©2021 Keio Senior High School, Printed in Japan.

無断複製・転載を禁ず